

隨泉寺寺報

平成19年(2007年) 10月号 第446号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代経法要

講師 龍仙寺住職 武田昭英・一真師

講題 『本願力にあひぬれば』

『我のみや あはれとおもはむ きりぎりす

なく夕かげの やまとなでしこ』 素性(そせい) (古今244)

【通釈】私だけがあわれと思うだろうか。こおろぎの鳴く夕べの光の中に咲いている大和撫子の花よ。

暑かった夏も、彼岸の終わりとともに、ようやくすこし涼しくなってきました。庭では秋の虫がすこしうるさいぐらい鳴いています。虫の声を聞いていると、なにやら物寂しい気持ちになるのは、私ばかりではないようです。萩の花や撫子の花もながめていると、すこし感傷的になってしまいます。

10月は永代経の法座です。先にお浄土に帰られた大切な方を偲んで、お寺にお参り下さい。

今月の御講師は府中の龍仙寺のご住職 武田昭英師です。武田先生は現在浄土真宗の安芸教区の560ヶ寺の代表として本願寺の宗会議員の重責を担ってくださっています。また本山西本願寺の筆頭総務として親鸞聖人750回大遠忌に向けて中心的に引っ張ってくださっています。また二日目は副住職の武田一真師がご法話して下さいます。誘い合わせてお参り下さい。

10月の法座予定

- 10月 7日.....掃除 中須賀・コモンライフ
- 10月14日昼席午後1時より.....秋季永代経法要
- 10月14日夜席午後7時より.....出張法座 コモンライフ集会所
- 10月15日朝席午前10時より.....門信徒の集い おとぎ
- 10月15日昼席午後1時より.....秋季永代経法要
- 11月 3日午後6時より.....門信徒会本部役員会

☆研修旅行

10月29日(月)に研修旅行に行きます。今回は希望の多かった山口県の長門市仙崎の金子みすずさんの記念館と山口2ヶ寺です。最初に山口市阿知須8203の明栄寺にお参りいたします。明栄寺には山口市の指定文化財の木造阿弥陀如来立像と木造十一面観世音菩薩立像があり、また住職の



遠縁にもなります。長門で昼食をとった後、金子みすず記念館に行きます。その後金子みすずの墓所のある遍照寺にお参りの予定です。

金子みすず/本名金子テル。明治36年(1903年)山口県大津郡仙崎村(今の長門市)に生まれる。大正末期、すぐれた作品を発表し、西條八十に『若き童謡詩人の巨星』



とまで称賛されながら、昭和5年(1930年)26歳の若さで世を去った。その優しさに貫かれた詩句の数々は、今確実に人々の心に広がり始めている。

-酒井大岳著『金子みすずの詩を生きる』から-

鯨法会は春のくれ、
海にとびうおとれるころ。
はまのお寺が鳴るかねが、
ゆれて水面(みのも)をわたるとき、
村のりょうしがはおり着て、
はまのお寺へいそぐとき、
おきでくじらの子がひとり、
その鳴るかねをききながら、
死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしとないてます。
海のおもてを、かねの音は、
海のどこまで、ひびくやら。



☆ありがとうございました。

7月16日の「新潟県中越沖地震」の発生から、2か月が経過し、被災地では、水道やガスなどライフラインの復旧も進み、仮設住宅への入居も順次始まっておりますが、一方で、いまだ不自由な避難所生活を余儀なくされている方もおられます。お彼岸会の法座のとき、お参りの皆さんから尊い募金をいただきました。厚く御礼申し上げます。

新潟中越地震募金 募金総額 65,214円

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 安国 辰子殿 故 安国 春三様 特別永代経志として
門信徒会へ 金 一封 宮内 芳明殿 故 宮内 美富子様 香典返しとして

赦されて すでに 大悲のふところに生かされている

眼鏡の度が合わなくなったのか
どうしても今のレンズでは見えにくいので、
眼鏡屋さんに行った。

「どうぞ」といわれて椅子にかけた とたんハツとした。

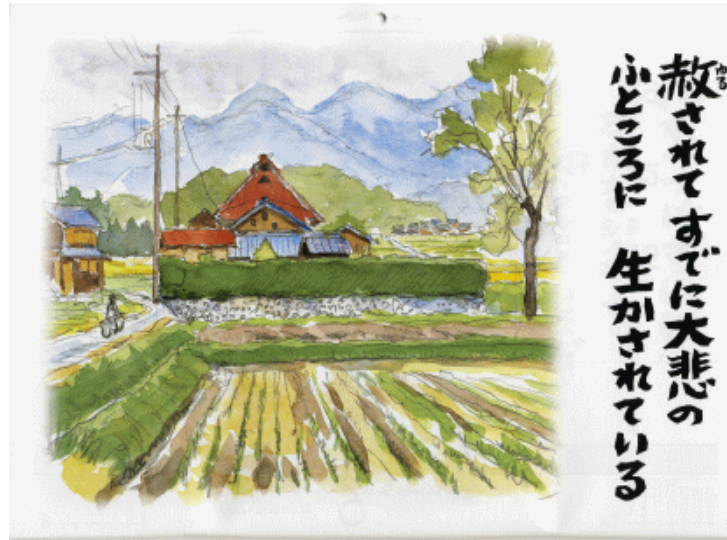
老醜そのもののような顔が真ん
前の鏡に 写っていた。

すっ裸で街を歩いていたような
いたたまれない はずかしさ。
こんな顔に、半世紀以上もつき
あってきてくれた。

老妻 家族 世の中の皆さん
おゆるしてください。

皆さん 自分が見てさえ
さむけ 寒気が走るこの顔は、
私のはらわたの思考や感情や意
志が そのまま にじみ出た
顔。

しかし こんな私が 赦されて 既に
大悲のふところに 生かされている。
「弥陀ノ本願ヲ妨グル程ノ悪ナキガ故ニ」



別れて始めてわかる有難さ。

夫は六月十二日八時二十分に亡くなりました。

昨年一月腰を痛めて入院しましたが、起き上がるのもままならないのに、二十日で退院して、家で寝たり起きたり大変でした。その内に少しづつ手すりを持ってトイレにも行けるようになり、五月頃はお風呂にも入れるようになり、杖をつき乍ら、車は永年のなれだと言って病院にも自分で運転して行くようになり、元気になれると思ってがんばっていたと思います。

一ヶ月に一度、マツダに予約して行っていました。病院帰りは買い物もして、一緒に行った時は、食事もしたり楽しくもあり、又心配でもありました。

腰の痛みが取れないので、検査してもらい、その結果腰の骨に癌が転移していたのです。

その時始めて癌である事を告知されて、がっかりして永くは生きられないと言っていました。頑張って杖をつき乍ら車に乗って病院通いをしていました。

でも今年の四月始め行かれなくなり入院生活になりました。毎日来てくれと言われて、始めは疲れるので「一日おきにしておよ」と、言ってもだめだめと言われて二ヶ月間一日も休まず行きました。

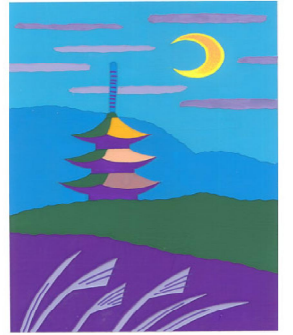
「父さん来たよ。」言って頭をなで手を握り足をさすりの毎日の繰り返してでした。「元気にしとって」と言って帰り、苦しみがないので自分は食事も取れないのに、私には「下に降りて[ちから]で食事をしてこいよ」と言ってくれていました。

元気な頃の事を思い出されて、旅行に行った時の事、食事した時の事、色々と走馬灯のように思い出されて、涙々で淋しさは益すばかりです。住職より頂いた千の風を読み、涙は出ましたが、少しは、あゝそばにいてくれるのかな、風のようにどこかで見守っていてくれるのかなと、気持ちがやすらぎました。

有難うございました。別れて始めてわかる有難さ。

佐々木 敏子

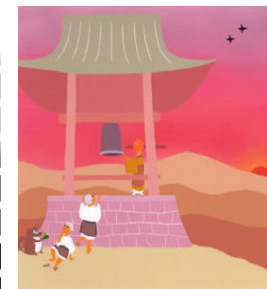
功德院釋一行 俗名 佐々木 敏明 平成19年6月12日往生 行年89才



「はかなさ」について

『世の中を 夢とみるみる はかなくも
猶おどろかぬ 我が心かな』 西行(さいぎょう)

人が生き、そして人が死んでいくという、その中に否応なしに刻みこまれてくる思いというものが常にあります。どれだけ大事にしている、どれだけ当てにしている、思い通りに行かない、「はかなさ」があります。「はかない」とは



「はか」がないこと、つまり、「はかがいく」「はかどる」の「はか」がないことで、努めてもその結果をたしかに手に入れられないということから、あつけない、むなしい、といった意味を持つようになった言葉です。その「はか」とは、田圃に稲を植えたり収穫したりする際の、仕事量を表す単位であり、さまざまなものを「はかる」という意味の「はか」ということです。「はかる」とは、ものごとを計算するという「計る」「量る」「測る」であ

り、またものごとの見当をつけてあれこれ突き合せ、論じ、調整するという「諮る」「忖る」「衡る」、さらにものごとを自分のためにもくろみ企てるという「図る」「策る」「謀る」でもあります。つまり、「はかる」という営みは、人がある意図・計画をもって生活するときには、必ず求められる基本的な営みということが出来ます。それが思い通りに行かないことが「はかない」ことであり、まさに人生です。